

バンコクおよび周辺都市の歩行者空間

— アジアの歩行者空間に関する研究 (その 3) —

金子友美・芦川 智・鶴田佳子・高木亜紀子

Pedestrian Spaces in Bangkok and the Surrounding Cities

—Studies on Pedestrian Spaces in Asia (3)—

Tomomi KANEKO, Satoru ASHIKAWA,

Yoshiko TSURUTA and Akiko TAKAGI

Many Thai cities have abundant waterways. This is a report of a survey, conducted in March, 2007, in the Thai capital, Bangkok, and other nearby cities including Amphawa, Samut Songkhram, Damnoen Saduak and Lopburi.

Bangkok is defined by branches and canals of the Chao Phraya River which flow through the center of the city. Waterside areas make up small or large community spaces and are used for a variety of daily needs including transportation and fishing. The researchers focus on the waterfront and the unique sidewalk spaces formed there. These spaces vary widely in the ways they are organized, used, and accessed.

Key words: Asian city (アジア都市), pedestrian space (歩行者空間), waterside space (水際空間), community (コミュニティ)

(1) はじめに

19 回続いた海外都市広場調査を終了し視点を変えてアジアの歩行者空間に関するシリーズ研究を始めたのは 2005 年のことである。しかし、海外都市広場調査の段階でアジアを対象として調査した回もあるので実質はもっと早い段階でアジア調査に着手している。今までに訪れたアジア諸国は、1992 年のトルコを皮切りに中国、台湾、インドネシア、インド、ネパール、トルコ、イエメン等、今回のタイと日本を含めれば 9 カ国となる。

都市の広場と都市の歩行者空間とは関連性のある対象である。つまり広場空間とは歩行者空間に内包される概念である。ヨーロッパで都市広場を追ってきた経験をもとに広場より広い概念で再度調査を試みるということが本研究のひとつの意味である。もうひとつは日本を含むアジアにはヨーロッパのような広場概念がないといわれていることにより、より広い概念の歩行者空間を研究の対象としたわけである。今までにアジアで行った調査から、広場とは異なる空間でありながら広場的な空間がアジアを対象として各種あることがわかってきた。同時にヨーロッパの歩行者空

間を広場だけで捉えるのは不十分であることもわかってきた。たとえば路地空間である。アジア特に日本では路地空間の多様な姿は現在でも良好な環境として紹介されているし、逆にヨーロッパでも路地空間が活かしている事例は存在している。その意味で方向は間違っていないかと思われる。

さて、「アジアの歩行者空間に関する研究 (その 1)」(昭和女子大学学苑 793 号) の報告で 9 個の概念的な歩行者空間の類型を挙げているが、今回の調査は 9 個の中の第 1 の類型に属する水際線とその周辺の歩行者空間を主な対象にタイのバンコクを調査地として設定した。

タイは 4 本の大河によって位置づけられている。チャオプラヤー川、メークローン川、ターチーン川とバーンパコン川であるが、この自然に流れる川とそれらをつなぎ開削された多数の運河の空間が河口地帯に広がるバンコクの生活空間を構造づけているといえる。それは豊かな水環境であるが、歴史的には豊富であるが故に苦渋を強いられた水環境でもあった。生活空間の形成と歩行者空間の形態のつくられ方を、水に対する両面性で見てもよいと思いついたのが本調査のきっかけである。

なお本稿では前半に調査概要と対象空間の紹介を行い、後半においてはそれらの調査事例の中からこの地域の特徴である水辺の歩行者空間に着目し検証した結果を述べ、さらに歩行者空間の類型化を試みている。

(2) 調査概要

①調査対象国: タイ

②実施期間: 2007年3月14日(水)~20日(火)

③調査メンバー (所属等は調査実施時のものである)

芦川 智 (昭和女子大学生生活機構研究科教授: 調査責任者)
 金子 友美 (昭和女子大学生生活環境学科講師: 調査スタッフ)
 鶴田 佳子 (昭和女子大学現代教養学科講師: 調査スタッフ)
 高木垂紀子 (昭和女子大学生生活環境学科助手: 調査スタッフ)
 田中 涼子

(昭和女子大学大学院生活機構研究科1年: 調査スタッフ)

守田あゆみ (昭和女子大学生生活環境学科3年: 調査スタッフ)
 元吉麻衣佳 (昭和女子大学生生活環境学科3年: 調査スタッフ)
 塚越 優子 (昭和女子大学生生活環境学科3年: 調査スタッフ)
 山田 笑子 (昭和女子大学生生活環境学科3年: 調査スタッフ)
 入之内 瑛

(都市梱包工房主宰, 元昭和女子大学非常勤講師: 調査協力者)

④調査日程と調査行程

1. 3月14日(水) Tokyo→Bangkok
2. 3月15日(木) Bangkok
3. 3月16日(金) Bangkok
4. 3月17日(土) Bangkok→Amphawa
→Samut Songkhram→Amphawa
5. 3月18日(日) Amphawa→Damnoen Saduak→Bangkok
6. 3月19日(月) Bangkok→Lopburi→Ayutthaya
→Bangkok
7. 3月20日(火) Bangkok→
8. 3月21日(水) →Tokyo

(3) 調査実施状況と都市の歩行者空間の概要

次に示すのは各調査地の歩行者空間の概要をまとめたものである。また本文中で用いている歩行者空間および住居等に関連する言葉のリストを以下に記す。

サパーン	木製の細い板状通路
サーラー	住民が共同で使用する船着場の小屋、個人で所有する場合もある。
ター	栈橋、船着場
ペー	筏、筏状に横に並んだ、水に浮く
チャー	タイの伝統的住居の前面に配される屋外空間。屋根のないものをノーク・チャー
ン	という。

バンダイ	階段
ホン・ノン	寝室
ラビアン	底下の居間
ルアン・ペー	浮家 (ルアンは住居を意味する古い言葉)
ワット	寺院, 僧院
ヤイ	大きい

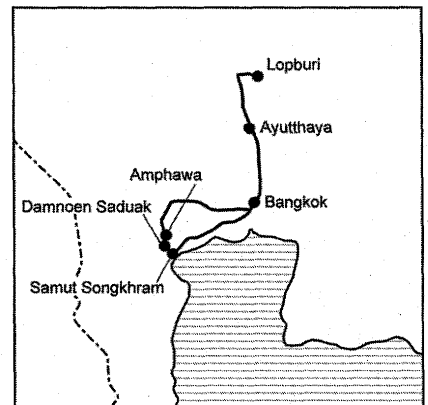
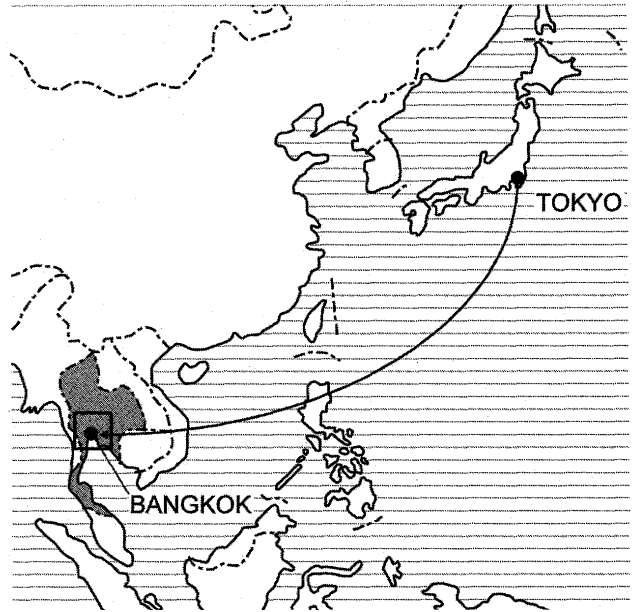


図-1 行程図

①バンコクの歩行者空間事例

バンコクはタイの首都であり、50の区からなる国内第一の都市である。調査範囲は、中央部を流れるチャオプラヤー川とその西側バンコク・ヤイ運河(以下、ヤイ運河とする)を中心としたトンブリー地区周辺、またチャオプラヤー川東岸王宮周辺の歴史的地区、さらにその東側の市街地におよんだ。これらの地区の水辺の空間、宗教施設周辺、市場、住宅等について調査を行った結果を以下に報告する。

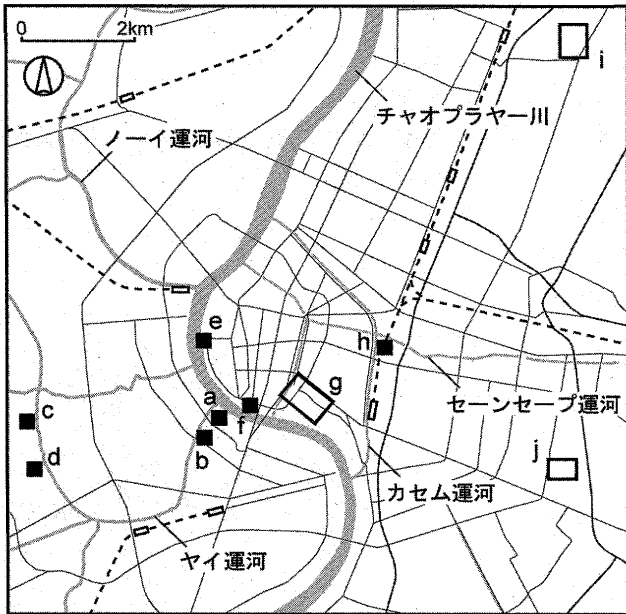


図-2 バンコクの調査地（記号は文章中の事例に対応）

i) ヤイ運河河口の町 a

チャオプラヤー川からヤイ運河に入ると、水門があり船の進入を規制している。水門の手前左側に小さな集落と船着場があり、人々が利用している。水辺に面した住居群の一角にプームさん宅がある。プームさんは奥さんと水を持って生活している。この集落は30世帯が暮らしており、元々は隣接しているワット・カラヤーナミット（寺院）の敷地内だが、昔から住んでいるため居住が許されているという。

船着場から南東へ住宅地を通して進むと、ワット・カラヤーナミットがあり、小学校も隣接している。寺院の前面

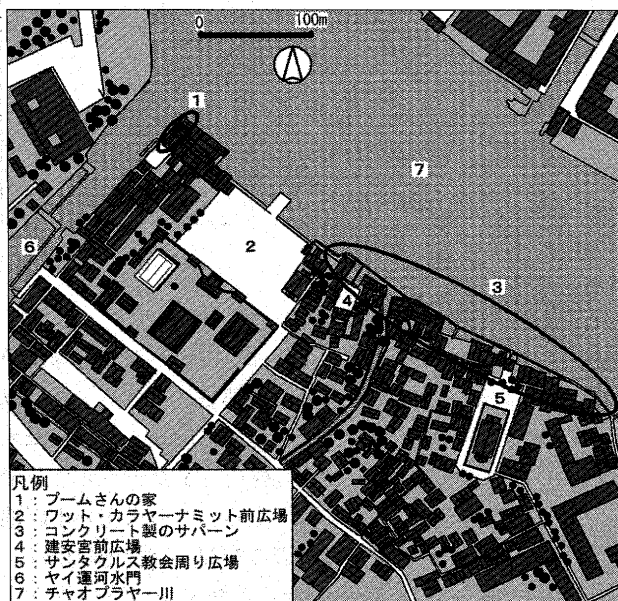


図-3 ヤイ運河河口周辺図

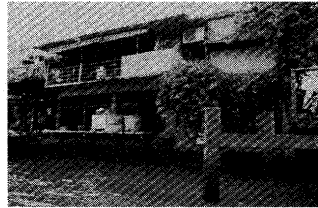


写真1 運河側から見たプームさんの家。

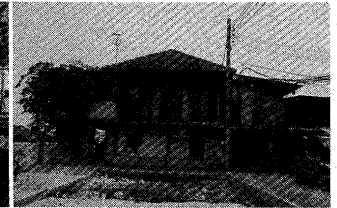


写真2 プームさんの家全景。左側に運河がある。

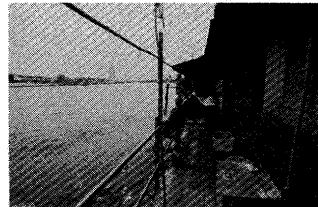


写真3 運河沿いの通路。



写真4 通路の屋根付きの部分にはベンチが置かれていた。

は広場となっていて、その奥を南東へさらに進むと商店街がある。規模は小さく、日用品や食料品を売っているが、この周辺の人々にとっては利用度が高く重要視されている。商店街には大きな菩提樹と祠がある。

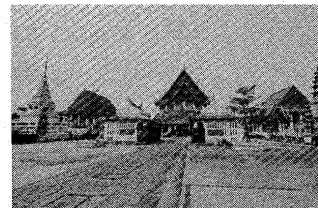


写真5 ワット・カラヤーナミット（寺院）と広場。



写真6 商店街と祠。祠の奥に菩提樹がある。

商店街をさらに進むと、路地に建安宮の小さな門が現れる。そのまま住宅の路地を進むと広場があり、建安宮がチャオプラヤー川に面して建っている。船着場もあり、そこから川に沿って新しく造られたコンクリートの遊歩道が続く。川沿いの住居は水が一定量以上浸出してこないよう、石堤で囲っている。遊歩道からサパーンを渡り住宅地に入ると、中央に祠のある小広場がある。ここはテーブルや椅子が置かれており、洗濯や皿洗いをする場になっていて生活の一部の場所である。また、サパーンは洗濯物を干したり、魚などの干物を作ったりする場でもある。木造の住宅は古く、傾いているものもある。



写真7 建安宮へと続くコンクリート製の遊歩道。



写真8 建安宮と広場。

チャオプラヤー川より南に進むと、水上の家はなくなり、コンクリートの歩道が続く住宅地に入る。住居もコンクリート造のものなどが続き、川沿いの住居よりも高級感がある。塀越しに中の様子をうかがうとテレビなど家電製品やペットの鳥や犬も見られた。さらに住宅地を南東に進むと広場が現れ、サンタクルス教会が建っている。教会の建物はチャオプラヤー川に正面を向けて建てられており、船着場も付加されている。さらに川沿いにコンクリートの遊歩道が続く。船着場の階段では、川の水で鍋を洗っている人の姿が見られた。

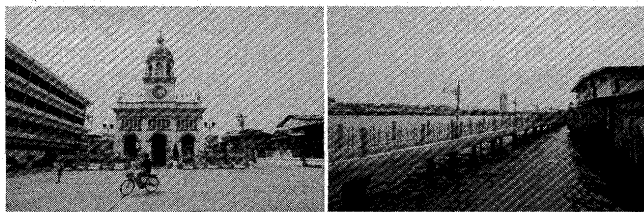


写真9 サンタクルス教会の正面
写真10 川沿いのコンクリート製の遊歩道と民家。

この事例は対象空間のほとんどについて車の進入が不可能な幅員のため自動的に歩行者空間となっているものである。つまり細街路空間の事例である。車の進入が必要な場合はこの細街路空間に直交する街路で対応することが必要となる。いずれにせよ、歩行者専用空間として人に優しい素朴な空間のしつらえがなされていることが観察された。

ii) モスクのある町 b

チャオプラヤー川をはさんで王宮の対岸にトンブリー区がある。ここは、1767年タークシン王によってトンブリー王朝の首都が建設された地である。15年後にタークシンが処刑され、ラーマ1世がチャオプラヤー川対岸に遷都すると、トンブリーはひとつの県となった。その後1972年バンコクに吸収され、現在はバンコクの行政区のひとつである。また現在ではこの行政区だけでなく、チャオプラヤー川の西岸部一帯をトンブリーと呼ぶことも多い。

このトンブリーにはムスリム、キリスト教徒、中国人、タイ人がそれぞれ信仰する宗教施設を核として地区を形成している。そうした宗教施設である教会や寺院は、建物の軸を水路と垂直にとり、建物ファサードを川や水路に向けている(サンタクルス教会、建安宮、ワット・カラヤーナミット参照)。対して、ムスリムが多く住むエリアに建設されたモスクはメッカの方向、西を向き、東側には墓地があり、緑地となっている。これらは水路とは関連のない配置となっている。(ムスリムの居住は1767年のアユタヤ陥落によってチャム人やペルシア人がこの地に多く移住したことによる。)

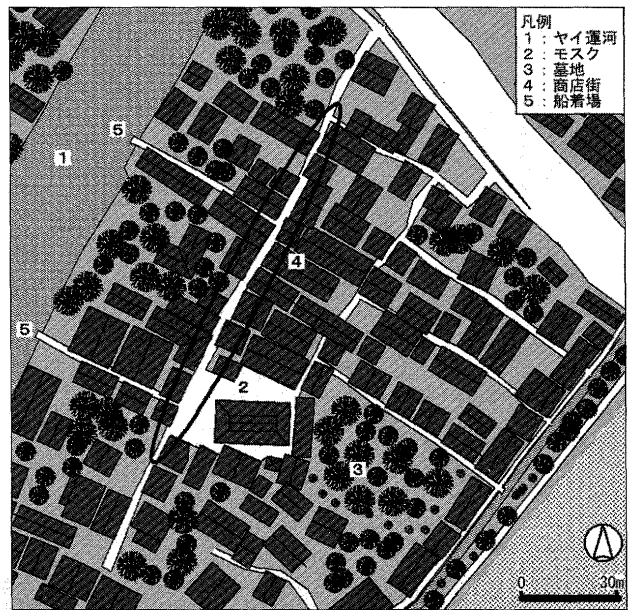


図-4 モスク周辺図

ワット・カラヤーナミットの南方、ヤイ運河近く、細い路地の入り組んだエリアの中に Bang Luang モスクがある。Bang Luang とは水路の名前であり、モスクはこの水路の土手部分に位置する。このモスクは通常タイの人々には、白い建物を意味する Kudi Khao という名称で呼ばれている。モスクの建物は約 22m×12m の長方形で、中心に礼拝施設があり、四方は屋根と柱だけの吹きさらしの空間となっている。入口のある東側には水場が設けられ、食器やベンチが置かれていた。モスクは広場の中心に配置され、周囲は一周することができる。広場には2~3階建ての民家が並び、一部は商店やレストランとなっている建物もある。広場にはこうした商業施設の商品がパラソルの下に並べられていたり、洗濯物が干されていたりする。鉢植えの植物や、バイク、籠など、広場にあふれ出た各家の領域と広場空間の境界は曖昧である。またモスク東側にはテント風の大屋根が架けられた吹きさらしの空間があり、男性たちがくつろぐ姿が見られた。この大屋根の下には、ステージ状の部分や掲示板があり、人々の集会・コミュニティ空間となっていることがうかがわれた。

これらを整理すると、東西の軸に沿ってモスク→人々の



写真11 モスク西側のファサード
写真12 モスク入口の空間。水場と広場。

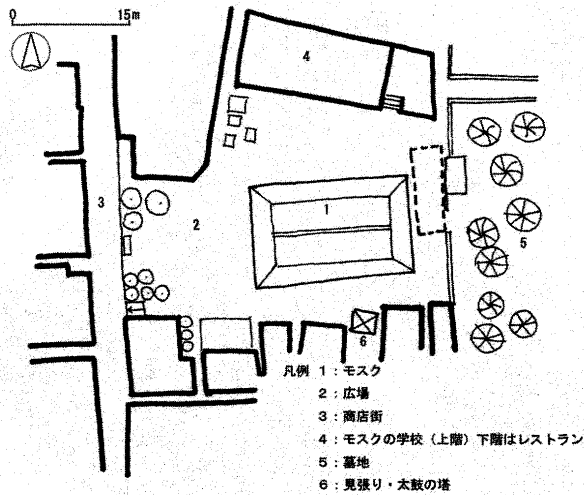


図-5 モスクおよび広場図

iii) 寺院のある町 c

バンコクの中心部の西方, ヤイ運河から少し入ったところにバンウェイク寺院がある。ヤイ運河から支流に入ると, 黄色い三角屋根のバンウェイク寺院が正面に見える。本堂が運河からの軸線を意識して配置されていることがわかる。周辺は1~2階建ての木造民家が並ぶ環境である。



写真17 ヤイ運河の支流, 正面に

写真18 バンウェイク寺院付近, 水路沿いの民家。

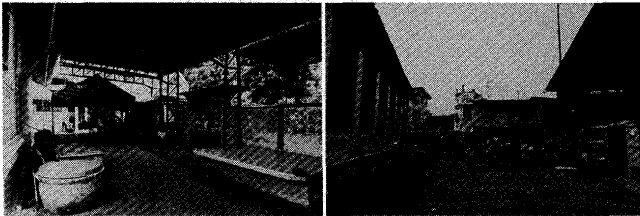


写真13 モスク西側の集会・コミュニティ空間。 写真14 広場空間。左側がモスク, 右にレストランがある。

バンウェイク寺院境内の領域は2mほどの高さの壁で囲まれ, 本堂の他に礼拝堂や鐘楼, 宿坊などいくつかの建築物が点在するが, 本堂の正面側つまりヤイ運河側は広場となっている。

塀の外, 寺院の敷地をぐるりと囲む通りには商店街が形成されている。扱われている商品は, 果物や魚・肉といっ

コミュニティ空間→墓地という空間配置と, モスクを中心として同心円状に公的空間→私的空間という段階的空間構成がなされていることがわかる。前述のようにこの地区の他の宗教施設が水を意識した空間配置をもつのに対して, モスクの向きと配置が空間構成の要因となっていることは特徴的である。

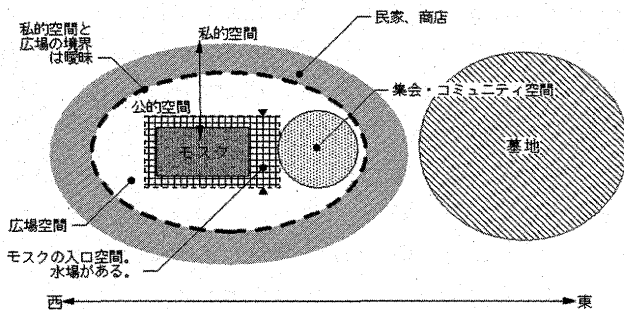


図-6 モスク周辺空間モデル図

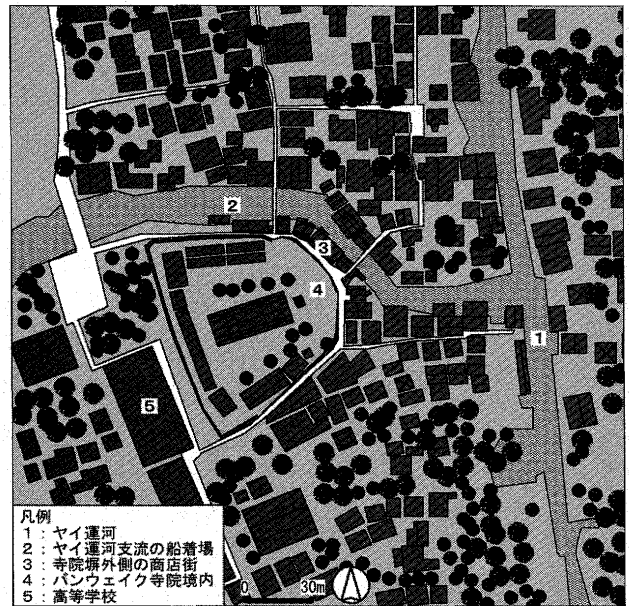


図-7 寺院のある町周辺図

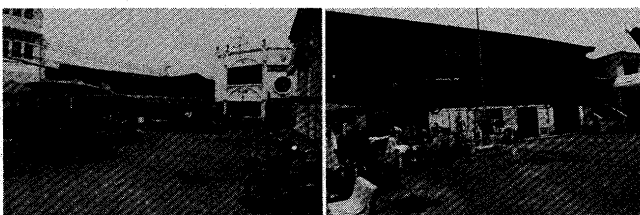


写真15 広場にあふれ出ている商店。 写真16 レストランの前には洗濯物が干してある。

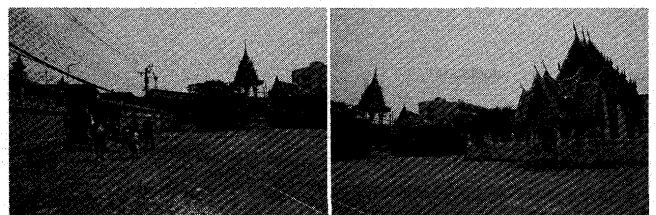


写真19 寺院の領域は壁で囲まれている。

写真20 バンウェイク寺院の本堂。前面は広場になっている。

た生鮮食料品から、雑貨、生花、菓子と多彩である。いずれの店舗も深い軒をもち、通りに対して天幕を張りだしてその下に商品を並べていた。

また寺院の正面、軸線上には市場があり、柱と屋根が架けられただけの開放的な空間に商品が多数並べられていた。以前はこの近くに船着場があったが現在は使われていない。

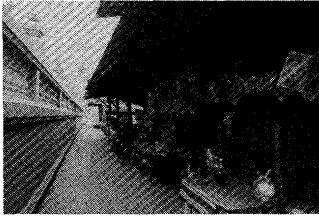


写真 21 寺院の領域を示す塀に沿ってのびる道路と商店。

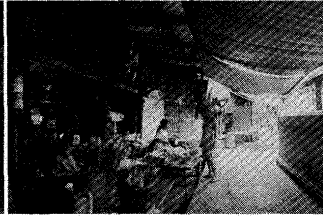


写真 22 道路には天幕が張られている。



写真 23 市場は開放的な空間となっている。

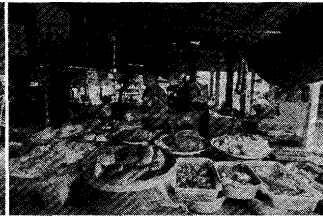


写真 24 市場で魚を売る女性。

この通りの幅は約 2m ほどであるが、各店舗から商品があふれ出ているため実際歩行者が通行できる空間はそれより狭く感じられる。そしてときおりバイクも通り抜ける。こうしたバイクは店舗の間に設けられた狭い橋を渡って対岸からやってくる場合もあり、突然目の前に現れる。歩車分離がなされていない状態であるが、店舗からあふれる商品や深い軒、天幕といった空間を構成する要素が通りと店舗空間を一体化させている。また、通りが大きくカーブしていることにより、次々と異なる風景が連続して現れてくるシーケンス効果も加わり、魅力的な歩行者空間を創り出している。

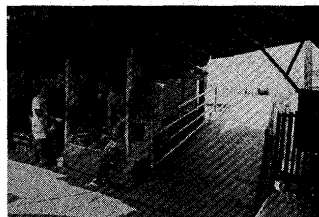


写真 25 店舗の間に対岸と結ぶ橋が架けられている。



写真 26 通りは寺院の敷地に沿って緩やかにカーブしている。

iv) マンゴの船着場と商店街 d

ヤイ運河沿いのワット・クハサワン(寺院)前の広場にある船着場にはマンゴの大木があり、そこを「マンゴの船着場」と名付けた。運河をはさみ両側には民家や商業施設が並んでおり、その前に運河に沿った木製の通路(ター・ペー)がある。ター・ペーは、一般の人でも通行可能で

あるがベンチや椅子、テーブル、植栽が置いてあったり、洗濯物が干してあったりと個人の空間としても使われていた。建物の屋根とは別に、通路には庇が架けられている。突き当たりの家は、引越し資金をもらい 2007 年末には引越しをし、博物館になる予定である。周辺の民家や商業施設は昔の市場風に改修され、博物館の周辺では水上マーケットも行われる予定である。

ヤイ運河にかかる橋はナーンソンプン橋という名前がついており、非常に勾配がきつく幅が狭いが原付バイクも通っていた。船着場の前庭としての広場に面する寺はアユタヤ時代からワット・サレと呼ばれた王室の僧院である。後にワット・クハサワンという名前に変えられた。

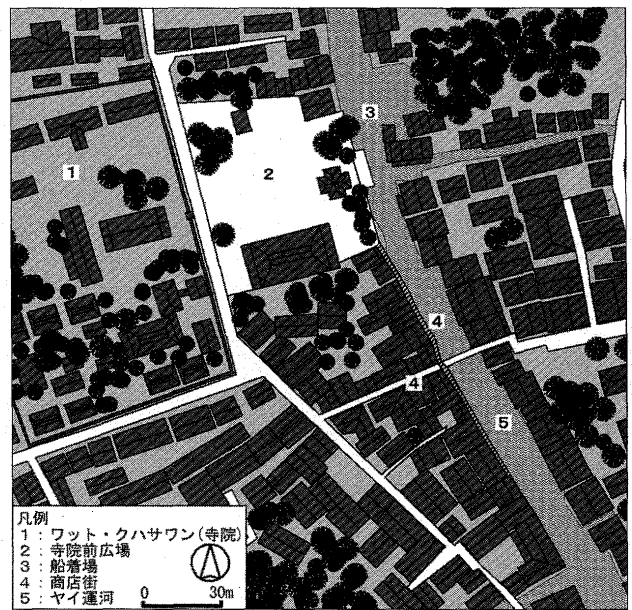


図-8 マンゴの船着場周辺図

マンゴの船着場自体は車のアプローチが可能な寺院前の広場となっている。しかし、この広場からのびる商店街は、水辺空間と陸地の接触する空間に位置しており、車の入らない空間となっている。というより現実的に幅員の上でも木造床組でできている商店街の構造上進入できない形態となっている。ただこの商店街の中央部分で交差する街路空間は地上とコンクリート橋によってできているので車の進入は可能であるがその幅員と橋の勾配の状況からしてバイク程度に限られている。

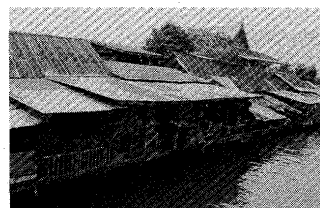
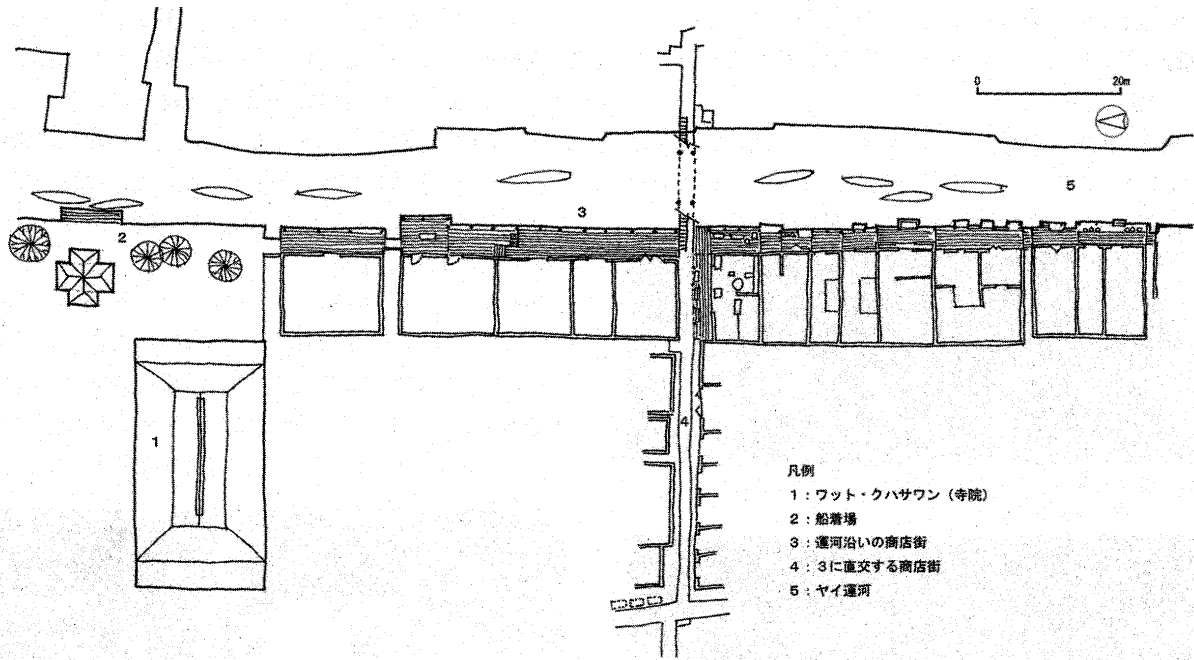


写真 27 運河側から見た商店街。



写真 28 ター・ペーで売られている野菜。



- 凡例
- 1: ワット・クハサワン (寺院)
 - 2: 船着場
 - 3: 運河沿いの商店街
 - 4: 3に直交する商店街
 - 5: ヤイ運河

図-9 マンゴアの船着場と商店街配置図

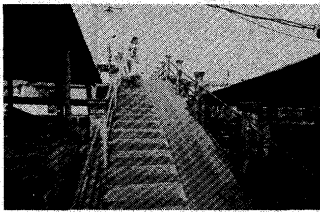


写真 29 ナンソンプン橋は半分が階段、もう半分がスロープになっている。



写真 30 船着場から見たワット・クハサワン。

v) 象の船着場と広場 e

これはバンコク市内で、王宮のすぐ近くにある船着場である。チャオプラヤー川をトンプリー側に移動する際に船はとても便利で、この船着場からはエクスプレス・ポート(水上バス)、渡し船、運河ボートなどが利用できる。現地人は日常的に利用している船着場である。

船着場の前にある広場にはリーラ・ワッディというライラックの一種の木が3本ずつ2列に並び、その木陰を中心とするように露店が並び、色鮮やかなトロピカルフルーツや惣菜、ワラ細工などの土産物が売られている。ここは数あるチャオプラヤー川の船着場の中でも一番の賑わいを見せている。広場には海軍の娯楽施設も隣接している。

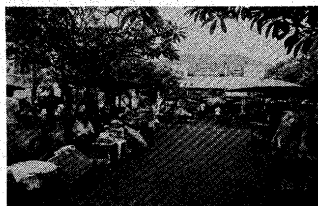


写真 31 船着場前の広場の様子。



写真 32 露店で賑わう広場。

この船着場の名称ター・チャン (Tha Chang) とは象の船着場を意味する。かつてこの船着場に象が水浴びをしに来ていたことからこの名がついた。正式名称は、19世紀初頭にラーマ1世がブッダ像をこの船着場から運んだことからブッダ像の船着場ゲート (Pratu Tha Phra) というのだが人々は好んでター・チャンと呼んでいる。この船着場は毎日営業しており、営業時間は5時から21時である。6時から7時頃が最も人出が多い。夕方になると広場の飲食露店が増えるようだ。



写真 33 船着場の建物。



写真 34 船着場からボートに乗り込む観光客。

船着場へは車でアプローチしたとしても最後は歩行して乗船しなければならない。この船着場の場合は付属して広場がありそれには道路部分があるが、露店や飲食屋台が増えると車の進入は事実上不可能となる。しかもリーラ・ワッディの並んだ広場部分は船着場を利用する人々の重要な憩いの空間となっているので完全に歩行者のための空間となっている。つまり、広場と船着場施設の組み合わせにより時間によっては完全に歩行者空間として機能している。

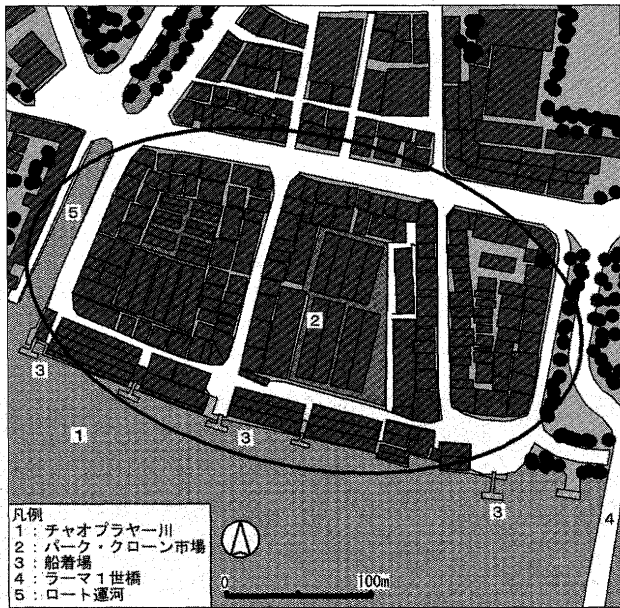


図-10 パーク・クローン市場周辺図

vi) パーク・クローン市場 f

パーク・クローン市場は花や野菜などを扱う24時間営業の青物市場である。チャオプラヤー川にかかるラーマ1世橋の北西のたもとに位置する。王宮のある中心部からはロート運河を挟んで南東に位置し、北東にはパフラット市場が続く。市場組合の話では、登録している店舗数は4000軒、毎月賃貸料を支払っているとのことである。パーク・クローン市場は大きく、国営と私営のエリアに分かれている。通りに面する店舗と施設内の路地に面する店舗で、賃貸料が異なっている。取り扱い商品は、チャオプラヤー川沿いの半屋外の大空間は、野菜等の生鮮品の卸市場となっている。市場は川沿いから北側内陸部に入ると大きく3ブロック、次に大通りを挟んでブロックが小さくなりながら10ブロックに分かれる。大通りに面する店舗の多くは花を扱っており、大通り北側では野菜、果物、菓子などの食材が中心となる。市場は基本的に24時間営業であり、一般の客も購入できるが、早朝は業者が買い付けに来て、賑わうようである。市場の一角に祠があり、ラーマ1世の弟が祀られている。今後の都市計画で水辺が再開発される可能性もあり、公園の計画図がまとめられていた。ロート運河沿いには保存建築物も並ぶ。

市場施設のため物資の搬入、積み出しには車が不可欠であり、食材を買い付けに来る業者も車に依っている。そのため1日中車と人であふれているのが現状である。市場周辺には若干広い道路部分があるだけで市場のための駐車場はない。そのため歩行者が進入することは想定していない空間であるが、建物施設内は基本的に歩行者空間として機能している。



写真35 大通り沿いの花屋。歩道にまで花があふれている。



写真36 川沿いの野菜市場、施設化された市場内部の様子。



写真37 市場内部で花を売っているエリア。

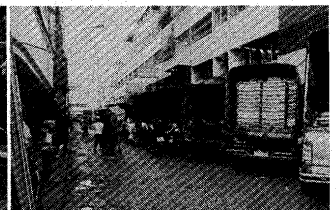


写真38 周囲の道路には荷下ろしの車がならぶ。

vii) サンペン (ハン橋周辺) g

サンペンはバンコク最大の商業地である。チャオプラヤー川に抜けるバンランプー・オンアン水路の東側に位置し、チャオプラヤー川の北側に並行する形で広がる。サンペンレーン(通り)、ハン橋、ヤラワート通り、チャルンクルン通り、チャイナタウン、屋根の付いた通りと店の底が両サイドから張り出す通り、大空間の旧市場と様々な形態がある。ハン橋を挟んで西側がインド人の多いパフラット市場で、布地を扱っている店が多い。東側のチャイナタウン、ハン橋周辺は布地関係が多く、雑貨、食品、様々なものが所狭しと並び、食堂や屋台も狭い中に店開きをしている。

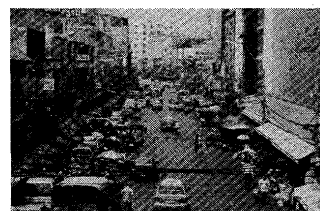


写真39 パフラット市場と通りの様子。



写真40 インド人街ともいえるパフラット市場。所狭しと商品が並ぶ。

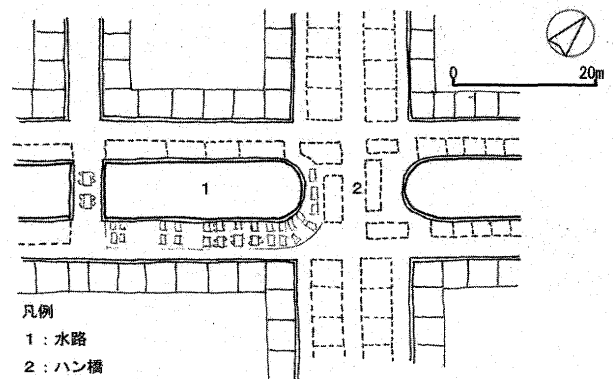


図-11 ハン橋周辺図

ハン橋周辺は、橋の上にも店舗が並び、テントで覆われているため、水路がほとんど見えない。橋の南側には水路沿いに食堂が並び、水路を眺めながら食事をすることができる。ハン橋の南側の橋の上も食堂になっている。なお、サンベンの中には廟がある。



写真 41 サンベン入口。通りは底とパラソルで埋め尽くされている。 写真 42 ハン橋周辺の食堂街。

この商店街通りは両側の商店からの商品のはみ出しや露店で賑わっていて、商店の営業時間は人々であふれている。しかし商店の営業時間外は普通の街路空間に変貌し、車も人もアプローチできる空間である。ただしこし幅員が狭い街路であるため、歩車道分離はできない状況である。つまり、街路の持つ機能によって歩行者専用の空間となる特性を有していると言える。

viii) ボーベ市場 h

パドゥン・クルン・カセム運河とセーンセーブ運河の交差している周辺に「ボーベ（喧嘩）」という名前のついた、布や衣料品を総合的に取り扱う市場がある。特にカセム運河の西側は、建物の1階部分が店舗となっており、狭い空間に大量の衣料品が置かれている。

以前はカセム運河に架かる橋の上と東側の河岸にも露店

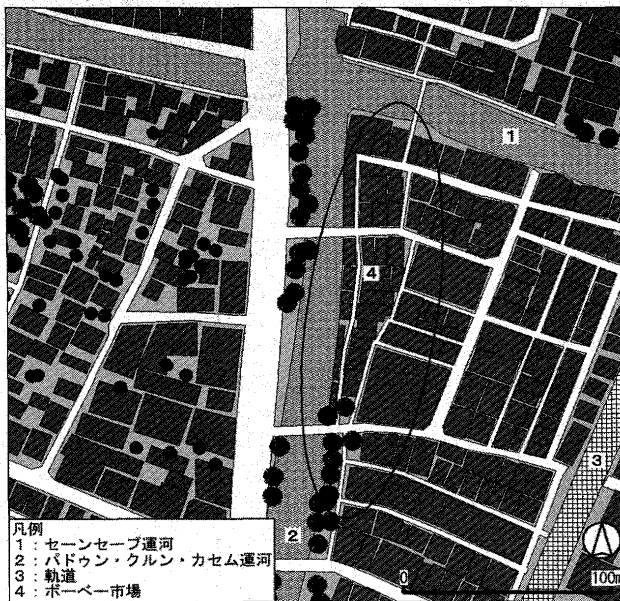


図-12 ボーベ市場周辺図

が並び、市場の賑わいを見せていたようである。しかし、2006年の暮れに警察が路上販売者に注意をした結果、65人が暴動を起こし裁判となり、路上販売者は立退きを余儀なくされ、2007年に路上販売が禁止された。調査時、東側の河岸は歩道としての整備工事がなされている状況であった。2006年12月、第2橋と第3橋の間の西側、線路寄りのエリアで火事が発生した。この火事で45軒の4階～5階建ての建物が焼け、2008年2月12日に建て直される予定であるとの話であった。



写真 43 カセム運河沿いの様子。 写真 44 狭い通路に並べられた商品の大半は衣料品である。

パドゥン・クルン・カセム運河に架かる4つの橋と運河沿いの商店街を対象として調査を試みたが、前記のように橋上の店舗に関しては一掃されていた。そのため、市場自体は運河沿いの1本の街路が調査の中心となる。歩行者空間としては市場が開いている時には車の入る余地はないほど商品と人で埋まっている。市場が閉じたときには搬入等で車両が入る可能性はある。

ix) チャトチャック・ウィークエンドマーケット i

この観光市場は週末開催される。週末には約20万人の人が訪れ、内15%が外国人である。隣の公園を含め、国鉄跡地である。国営と民営のエリアにわかれている。国

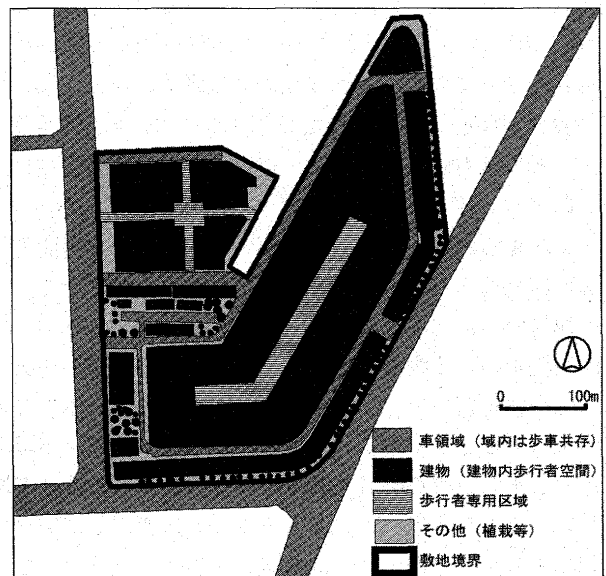


図-13 チャトチャック・ウィークエンドマーケット配置図

営エリアは土日の8時から18時、露店は朝4時から営業している。店舗数は8827店舗。仏暦2525年(西暦1982年)1月2日に開設し、25年の歴史がある。9時半からは、敷地内を無料バスが運行している。店舗の大きさは1ブース2×2.5m、ほとんどの店は1ブース、動物売り場などでは4ブース使用している。水曜と木曜はゲート1から延びる通りでフラワーマーケットが開催され823の露店が出る。国営エリアのほぼ中央には1976年に建てられた時計塔があり、待ち合わせ場所としても利用されている。時計塔のある通りの西側で、土日にスペシャルマーケット、毎月最終日曜にはオークションが開催される。店舗数はともに252店舗、テント数は520である。民営エリアは平日10時から17時、土日は9時から19時まで営業している。店舗数は630店舗。(店舗数は調査時のものである。)

出店数からかなり大規模な形のマーケットである。歩行者空間としては大屋根の架かった建物施設の中央部に中庭的に屋外空間を取り込んでいる。そこに時計塔を配置してこのマーケットのランドマークとしている。

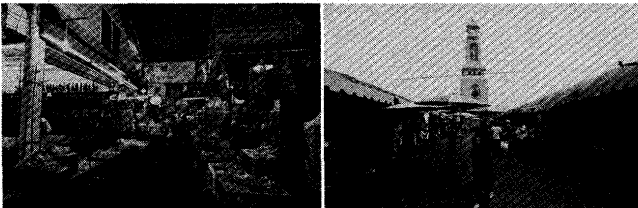


写真45 施設内部は区画されている。 写真46 ランドマークとなっている時計塔と広場。

x) スアンルム・ナイトマーケット j

スアンルム・ナイトマーケットはラーマ4世通りとウィッタユ通りの交差点に位置し、ウィッタユ通りを挟んだ東側にはルンピニ公園がある。地下鉄のルンピニ公園駅を出ると目の前に入口があり、2001年オープンした3700店舗という、バンコク最大規模のナイトマーケットである。午後3時から深夜まで営業しており、土産物、衣類、アクセサリ、果物、CD、手工芸品、絵画や彫刻などの美術品が売られている。場内西側には巨大なフードコートがあり、各国の食べ物露店がずらりと並んでいる。前方にはステージがあり、生演奏やダンスショーなどが行われる。また、北東部にはコンサートなどが開催されるベック・テロ・ホール、中央部にはタイ伝統の人形劇を毎晚上演しているジョー・ルイス劇場がある。2006年5月には、ラ・ルー・デ・パリという観覧車ができ、ナイト・マーケットのシンボリック的存在となっている。この近くにインフォメーションがあり、施設の案内図が入手でき、マーケットの中心として待ち合わせ場所等に活用されている。

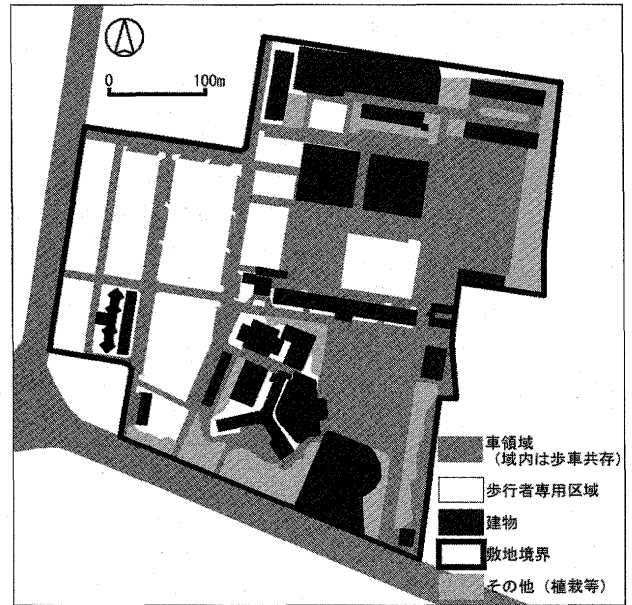


図-14 スアンルム・ナイトマーケット周辺図



写真47 観覧車とインフォメーションの夜景。 写真48 施設内部の様子。

スアンルム・ナイトマーケットの場合は当然のことながら、域内の車道及び駐車場の部分と歩行者空間を明確に区分している。ただし市場が営業している時間では車道部分は歩行者空間あるいは歩行者優先空間となっており、車と歩行者の共存空間である。それ以外の時間は搬入搬出のために車道は機能しており、車優先の空間となっている。もちろん市場利用者が車でアプローチする場合の駐車場は市場周辺に確保されている。

②アンパワーの水上マーケット

アンパワーはバンコクの西南70km、メークローン川下流に位置している。大小様々な水路が縦横に走り、水運が発達している場所で、この地域に暮らす人々にとって川や水路は生活に欠かせない存在である。メークローン川から引き込まれる水路の両岸に、1kmに亘って店舗や住宅が建ち並び、水路の先にはワット・パパヤードというタイ寺院がある。水上マーケットは50~60年前から行われていたが、地元住民のためのもので観光客向けに開かれていたわけではなかった。川沿いの店舗は車の普及に従って徐々に姿を消していった。元々、虫見物の名所として外国人に人

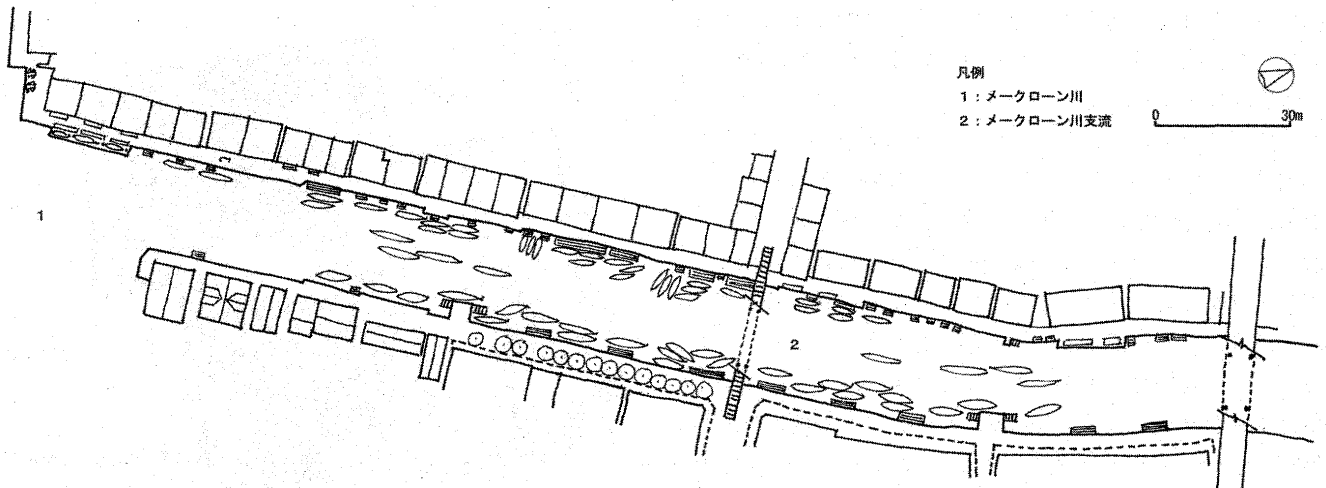


図-15 アンパワ中心部

気の場所ではあるが、タイ人観光客を呼ぶために3年前の8月11日から4日間王妃の祭り(母の日)が行われた。橋を挟んだ兩岸の Amphawanniwet Road と Leapnatee Road にはパラソルの露店が立ち並び、水上マーケットも開かれていた。その祭りが習慣化され、現在は条例により毎週金曜から日曜の16時から21時に市が開かれ観光客で賑わっている。川沿いや通りの店舗・露店約300店、舟約40店が菓子や果物、歩きながら食べられる軽食、土産物を販売している。橋のもとには大屋根が架かった市場施設があり、毎日朝市が行われている。周辺2km圏内に住む住民たちが売買に訪れる。

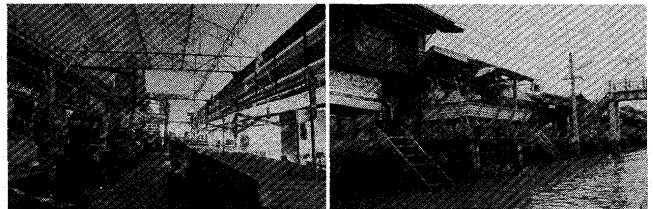


写真51 毎日朝市が行われる橋のたもとの市場施設。 写真52 中心部から少し離れた川沿いにはバンダイをもつ民家が並ぶ。

タイの水上マーケットの特性として水上の舟に積んだ物品を購入する形態か、水上の舟に客が乗り地上に用意された商店の商品を購入する形態とがあるが、アンパワの水上マーケットの場合は前者の形態である。いずれにせよ、水上と地上の接触領域を利用した歩行者空間の形態である。そして水面の干満による上下に対応するための装置として階段を活用している。

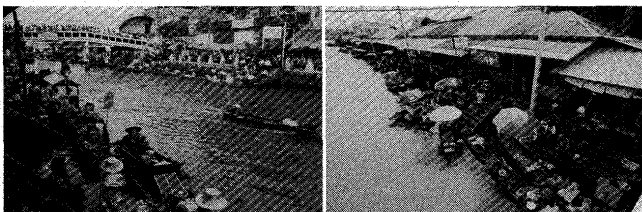


写真49 食品を載せた舟を岸に寄せる。 写真50 バンダイに腰掛ける観光客と舟とのやりとり。

川岸の建物は増改築を内陸にのぼし、内陸に進むにつれて緩やかに傾斜した土地に、高低差を考慮して建てられている。前面の水上に水路と平行にター・ペーが設けられ、そこから水路に向かって各々の間口前にバンダイがのびている。これは1日に2m前後ある激しい水位の変化に対応するために設置されている。

1953年に起きた大火災が原因で、住宅の中にはコンクリート造の近代的なものもみられる。ター・ペーも現在はコンクリートでつくられている。また、橋は3回目の架け替えからコンクリート製になり、現在架けられている橋は4回目の架け替えによるものである。

③メークローン駅と線路のマーケット

メークローン駅のあるサムットソクラームは、バンコクから南西におよそ60kmの位置にある。この地域は長い歴史を持ち、18世紀のトンブリー王朝時代には戦時の要塞都市としてビルマ軍を撃退したことで知られている。

メークローン駅とバンコクウォンゲンジャイ駅間には国営鉄道が走り、線路沿いには、細い通路を挟んで市場と線路際の露店からなるユニークなマーケットが広がっている。



写真53 線路上に並べられた果物と線路上を行き交う人々。 写真54 電車は店舗のすぐ際を通る。一部の商品は線路上に置いたままである。

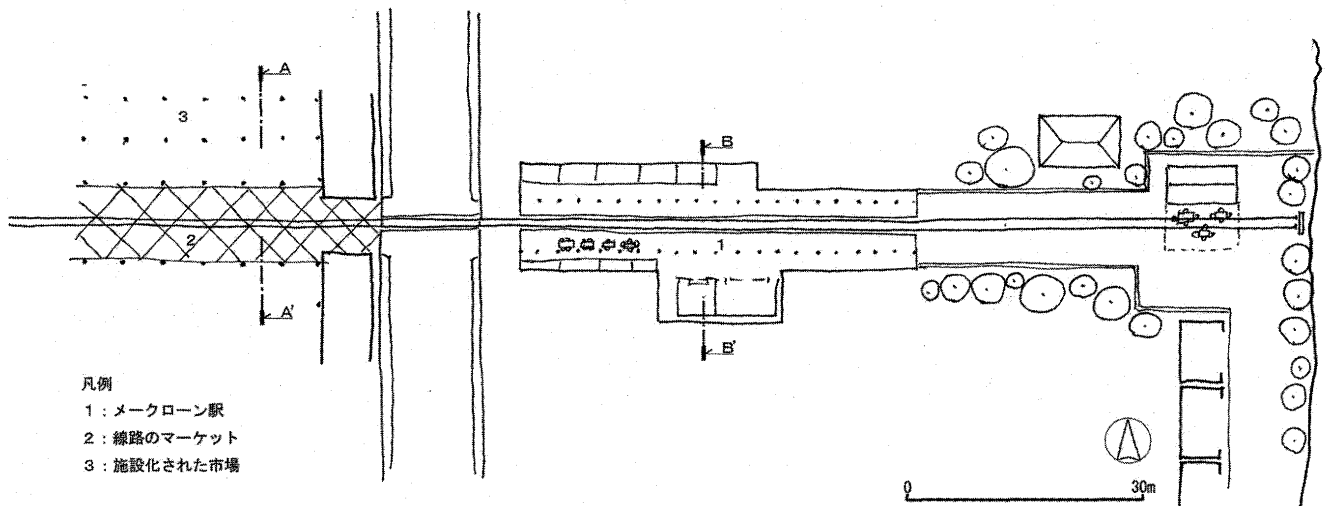


図-16 メークローン駅と市場

露店では主に果物や魚、野菜などが売られている。線路上にまで商品が並べられていて、列車が通る際に数十秒で片づけをし、通過後すぐに営業を再開する。列車の車体に当たる心配のない魚などは大胆に置いたままである。市場の方では、露店と同じような生鮮食品のほか、ビニール袋に入れられた加工食品や玩具なども売られている。

1日に4本の列車しか通らないためにこの形態が生まれた。きわめて特異な形の歩行者空間である。歩行者は線路の間を歩くことになる。

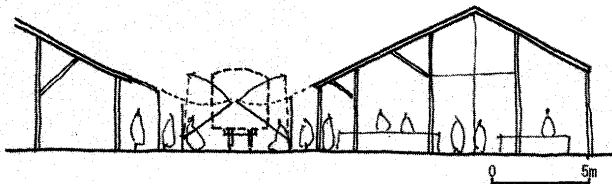


図-17 メークローン駅線路のマーケット断面図 (A-A')



写真55 メークローン駅。駅舎内

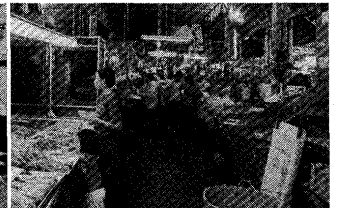


写真56 線路の隣にある施設化された市場。

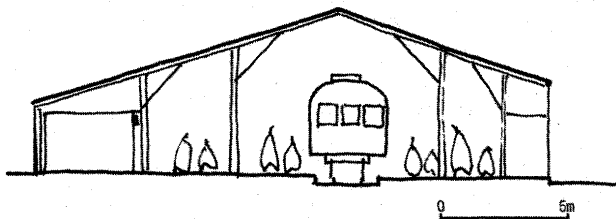


図-18 メークローン駅断面図 (B-B')

この辺りは10年前には住人が10人程しかおらず市場しかなかったのだが、そこからあふれた露店がどんどん増えてしまい現在のようなになる。タイでは露店は線路から5m離れていなければならないという法律があるのだが、この地帯は特別に300店舗までに限り線路際での営業が許可されている。家賃は無料だが、掃除代だけ毎日役人が徴収に来る。店の大きさにより5から20パーツまでの幅がある。市場の営業は4時30分(準備時間含む)から18時。列車は1日4本で、6:20、9:00、11:30、15:30に発車。1回平均50人が乗車し、乗車賃は10パーツ/人である。

④ダムヌン・サドゥアクの水上市場

色とりどりの果物と野菜を満載にした木製の小舟を藍色のシャツと大きなつばの麦藁帽子を身につけたタイの女性が漕いでいる。そんな光景は20年以上前のことである。現在は、7年前から観光化が大幅に進んでいる。水上市場は日曜から月曜まで、毎朝早くから13時まで営業している。連日、多くの観光客で賑わっており、日曜はタイ人も多く訪れる。

大屋根の架かった市場施設はコンクリートで整備され、水位の変化に対応できるよう水辺に向かって階段状になっている。施設には外国人向けの土産物や果物が売られていて屋台のような小さな食堂も併設されていた。水上は観光客を乗せた舟でひしめきあっている。両岸にある露店では主に工芸品や民芸品などの土産物が販売され、中にはブランド製品を販売している露店もあった。

木製の小舟の上では料理(麺類・粥)や焼き菓子、ココナッツのジュース、カットフルーツが販売されていた。料理や菓子は舟の上で調理し、販売している。料理や果物は観光客だけでなく市場で商売をする人も買っていた。

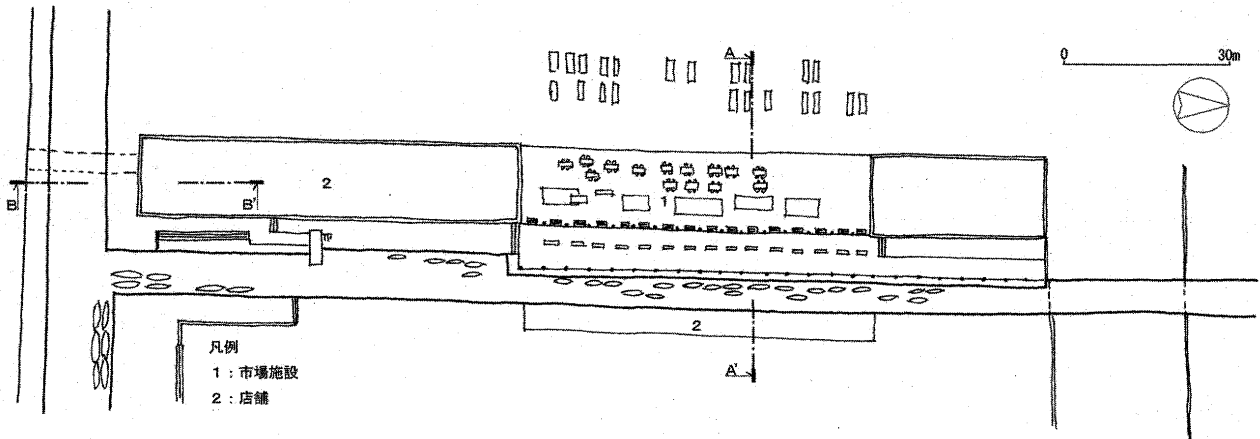


図-19 ダムヌン・サドゥアク中心部

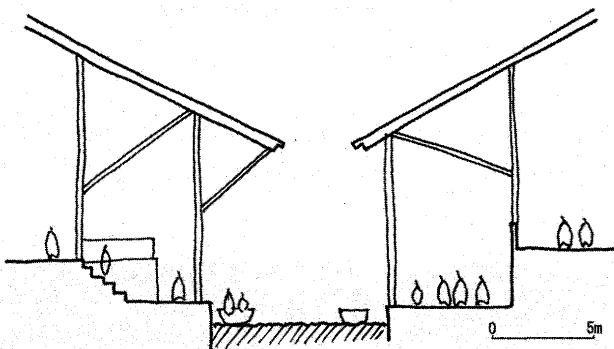


図-20 ダムヌン・サドゥアク断面図 (A-A')

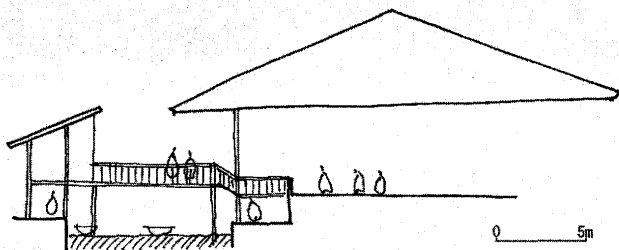


図-21 ダムヌン・サドゥアク断面図 (B-B')



写真 57 中心部の施設と水辺の空間。

写真 58 舟に乗って土産物屋をまわる観光客。

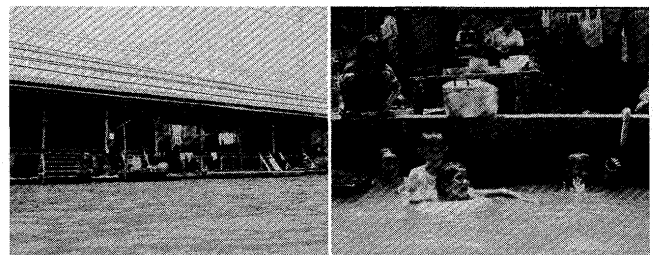


写真 59 ダムヌン・サドゥアク運河沿いの民家。各家にバンダイが設けられている。

写真 60 家の前の運河で水遊びをする子どもたち。

水上マーケットを北上するとダムヌン・サドゥアク運河がある。ダムヌン・サドゥアク運河はメークローン川とターチーン川を結ぶため、ラーマ4世が1860年に開削した運河で、長さは36kmに及んでいる。川沿いは住居が並び、水浴を楽しむ居住者の姿などのんびりとした風景が続いている。住居の前には運河と平行にコンクリート造のター・ペーがのび、各住居に木製のバンダイが運河に向かって設けられている。

ダムヌン・サドゥアクの水上マーケットの場合は客が舟に乗り水辺の商店をまわる形態を主としているが、商品を積んだ舟に客の舟が横付けして購入する形態も部分的にあり、水上マーケットの形としては複合形といえる。この地区のセンター部分すなわち船着場の空間はかなり大規模に施設化されており、階段を利用した歩行者専用空間を形成している。

⑤ ロップリーの民家

ロップリーはバンコクの北153kmの所に位置し、先史時代からの長い歴史を持つ古い町で、現在の人口は約54,000人である。ロップリーがタイの歴史に重要な役割を持つようになったのはアユタヤ時代の大王、ナーラーイがこの町を第2の都とし、年に8~9カ月をここで過ごしたからである。ロップリーの最も栄えた時代であった。

ロップリーの町は、南北に流れるロップリー川の両岸に形成され東側には季節ごとの水位に対応できる傾斜を持つ高い土地がある。ここには市場が形成され様々なものが売られているが、これはこの地がロップリー川とその支流の合流点であることにも起因している。街の南側には城壁が残りがつては城砦都市だったことがわかる。現在では野生の猿が多く生息し、猿の町として知られている。

i) ガッチャンち

数軒の家がサパーンによって繋がって建てられている。そのうちの1軒の家が「ガッチャンち」である。この家には49歳の女性と娘3人、それぞれの配偶者と孫娘の8人が暮らしている。孫娘の名はガツ（1歳9カ月）。娘夫婦の1組（ガツの両親）はコンピュータ部品の会社ミニベーに勤めている。昼間は祖母にあたるこの女性がガッチャンの世話をしている。残る2組の夫婦は輸出用シーフードの会社に勤めている。女性の父親は調査時に家に来ていたが、別の家で暮らしている。この家は賃貸で、月1000バーツで借りて暮らしている。ガスはプロパンガス、飲水はかめにためて使用している。一度に大勢入ると家が壊れる可能性があるということで、数名が中に入り実測調査を行った。内部には3寝屋があり、家具類は充実している。



写真61 入口のサパーン

写真62 ガッチャンち内部

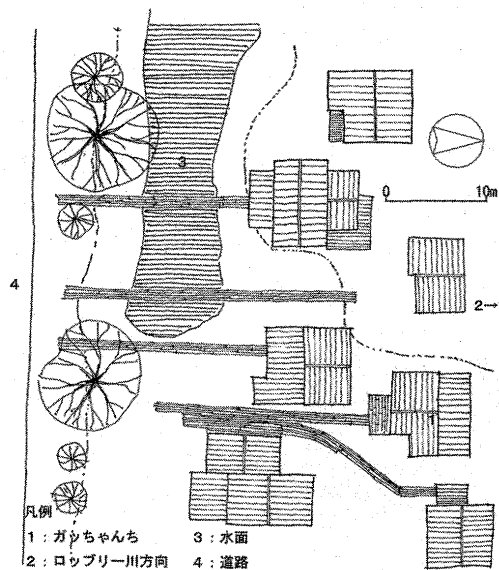


図-22 ガッチャンち周辺図

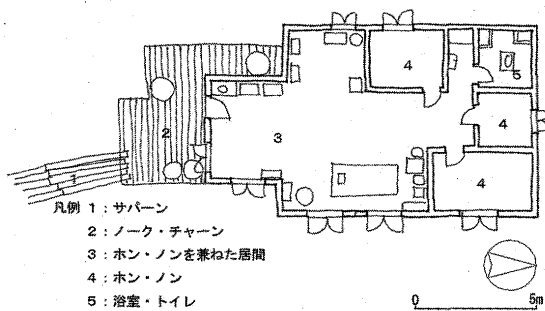


図-23 ガッチャンち平面図

ii) 村長さんの家

人口およそ600人（71世帯）の村の村長さんの家である。子どもが3人（女2、男1）いるが結婚して独立し、現在は夫婦2人で暮らしている。1階は倉庫とトイレになっており、主に2階で過ごしている。階段を上るとラビアンにテーブルと椅子があり、脇には小さな食器棚があった。料理はあまりしないようである。この建物には、以前、副県知事が住んでいたが、現在の村長が50年程前にこの地に移住した時、土地と家を20万バーツで買い住んでいる。建物自体は100年以上前のものである。

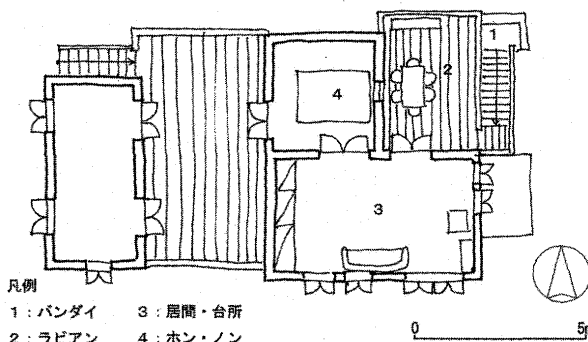


図-24 村長さんの家平面図

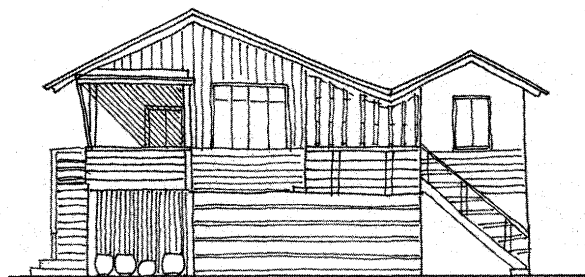


図-25 村長さんの家北立面図



写真63 村長さんの家の外観

写真64 村長さんの家の内部

iii) 川の浮家

この川から上の市場（後述）に向かって緩やかな上り斜面になっている。以前は船着場として市場の品物を運んでいたようだが、現在は使われておらず、調査時は子ども達が釣りをしていた。川に浮かんでいるこの浮家はそれぞれ番地を持っており、電気、水道も整備されている。雨期には階段の一番上まで水が来てしまうため、休憩所も水に浸かってしまう。その時は、浮家はロープで結び付け固定している。また浮家が壊れると、そのたびにつくり直しなが

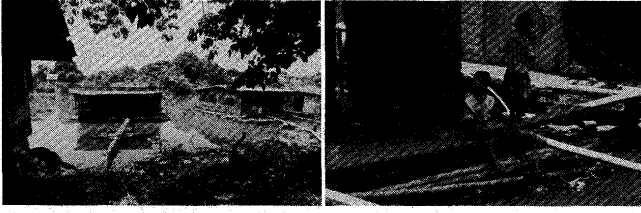


写真 65 浮家はサパーンでつながっている。 写真 66 浮家の上で遊ぶ子ども達。

ら住んでいる。現在近くに浄化槽を建設中である。

iv) 上の市場

前述の川から少し斜面を上った所に、タイ語で「上の市場」を意味する名前が付いた市場がある。ここはロップリー川とその支流の合流点にあり水運に便利で、以前は川から品物を運んでいたようだが、現在は川とはつながっていない。この市場は南側が個人経営、北側が国営と分かれていて、パラソルを広げ露店を開いている。露店は独立しているものがほとんどで、個人経営の露店は37店全て独立している。国営の露店は30店が独立、10店は店舗付属の露店であった。仏暦2508年(西暦1965年)から42年間営業を続けており、市は5時から14時まで行われている。

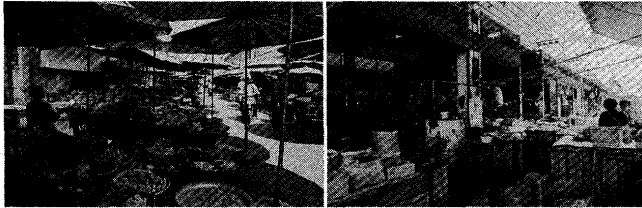


写真 67 路上に広がったパラソルと露店。 写真 68 施設化された店舗とそれに付随する露店。

v) ロップリーの歩行者空間

ロップリーにおける歩行者空間は水辺に造られた住居と商店街の空間となっている。水辺空間は水位が変動するのに対応して住居や商店街側の装置化が行われていないと空間として機能しない。住居の場合はサパーンという装置が活用され、商店街では水辺側は物資の搬入、反対側が商店を利用する客側で高低差によってそれを解消する形式を作り出してきた。しかし、この形式もだんだん失われていく方向にある。というのは水辺護岸を立ち上げ、水面領域が変化しない形式にして陸側の環境を定常化する方法である。これにより、それまでの歩行者空間を含めて水辺空間の独特な環境が失われていく傾向にある。タイ政府もそれを推し進めているようである。

(4) 水辺と歩行者空間

前述の各都市における歩行者空間事例では様々なタイプ

のものをとりあげたが、いずれの都市においても水辺環境との関係に特徴があった。これは今回の調査地域がチャオプラヤー川河口のデルタ地帯に位置することによるものであろう。首都バンコクにおいては、チャオプラヤー川と運河・水路が都市生活に重要な意味をもち、歴史的にも市民生活と大きく関わってきた。船着場・宗教施設・市場空間・住居、現代においてもこれらが水の環境と関わりながら機能していることを今回の調査で確認することができた。また一方で、バンコク周辺の小都市においては水上マーケットや浮家集落など、都市部では失われた素朴な水辺との関わり方を観察することができた。

本項においては、こうした水辺と都市空間の關係に着目し、その空間形体を整理する。

①水辺の接触領域の歩行者空間

バンコクおよびその周辺は、サバナ気候あるいは熱帯モンスーン気候に区分される。これらの気候は雨期・乾期の別があり、水辺における水位の変化が激しい。チャオプラヤー川下流のアンパワーにおいては、毎日2m余りも水位が変化する。こうした水位の変化に如何に対応するか、それが水辺と歩行者空間の接触領域としてどのような空間を形成しているかを整理する。

i) 基本形

水辺の基本形は、水面に対してほぼ垂直に護岸がつくられている形である。ある程度の高さを確保しておけば、水位の変化にも対応できるが、水辺を積極的に利用する形とは言い難い。

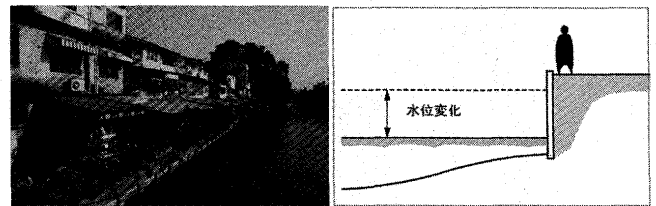


写真 69 水面に垂直に設けられた護岸。

図-26 基本形断面図

ii) 階段(バンダイ)

水面に対して階段または梯子状の装置を設けているものである。水位の変化に応じて、使用する高さが異なる。市民生活においては、洗濯や炊事などの生活用水として水を使用するための空間として使用されている。また水上マーケットにおいては、水位の変化にかかわらず商業活動が可能な空間となっている。いずれも水辺へアプローチするための装置であるが、単なる移動のための空間ではなく、水辺に人が近づきそこにある時間滞在することを可能にして

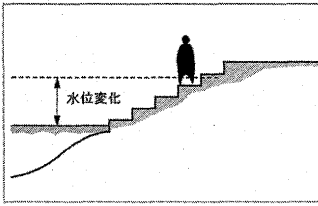


図-27 バンダイ断面図



写真70 近所のバンダイで炊事作業をする人。



写真71 階段状の空間と水上マーケット。



写真72 個人の家に直結するバンダイで作業する人。

いる空間である。

iii) 水上住居 (ルアン・ペー)

水位の変化が大きい地域では、水上に家がつくられているものがあつた。これらの家々はサパーンと呼ばれる細い通路でつながっており、簡素なつくりのものが多い。水底に杭を打ち、高床式の構造をもつものと、水面に浮かぶ浮家形式のものがあつた。前者へアプローチするためのサパーンは住居と同様に杭上に設置されているが、後者の浮家ではアプローチの通路自体も水面に浮かんでおり、不安定である。しかし逆に考えれば、この水面に浮かぶという方法は、水位の変化に対して最も柔軟に対応するための装置であるといえよう。



写真73 高床式の住居。杭を打って支持している。

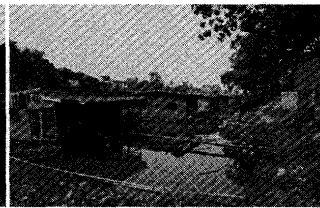


写真74 浮家。水面の上下に連動する。

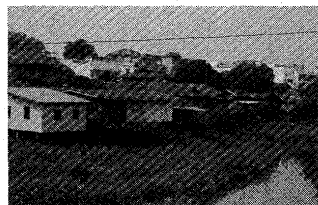


写真75 水が引いている時の高床式の住居。

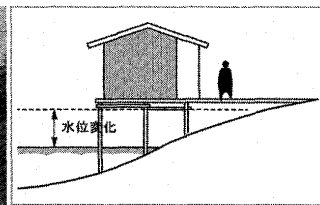


図-28 水上住居断面図

iv) 通路 (サパーン, ター・ペー)

前述の水上住居に見られたサパーンは、幅の狭い板を渡した形で簡素なつくりのものが多かつた。これらは各住居

へのアプローチのための装置であつて、機能的には通路でしかない。一方水際の空間に設けられた通路で、少し幅の広いものは、通行のためだけの空間ではなく、人々の生活空間の一部であつたり、コミュニティの場であつたり、他の機能を兼ね備えた空間となる場合がある。

長屋形式の住居の水辺に沿って設けられた幅の広い通路ター・ペーには、縁台が置かれ、鉢植えの植物や洗濯物であふれている。農機具や家財道具が置かれている場合もある。暑さの厳しいこの地において、通路は水辺の涼をとれる空間であり、家空間の一部でもある。

また同時にター・ペーは公的な空間としての機能もある。観光地や船着場の近くでは、通路に面して商店街が形成されその軒下は一般に開放され、通路と商店が一体化して機能している。通路側に商品が並べられる場合もある。この場合の通路空間は、家々の一部でありながら、商業活動の場として機能し、不特定多数の人を受け入れる空間である。

近年はコンクリートで形成された通路もあるが、単にコンクリートの板だけのものから遊歩道として整備されているものまで、その形体は様々である。

これらの通路空間には、所々に船着場が設けられ、水上からのアプローチが可能になっている。また住居毎にバンダイが設置されている場合もある。都市において水路や河川は風の通り道となる。それらに沿って設けられた通路空間は厳しい気候を緩和してくれる人々の憩いの空間でもある。

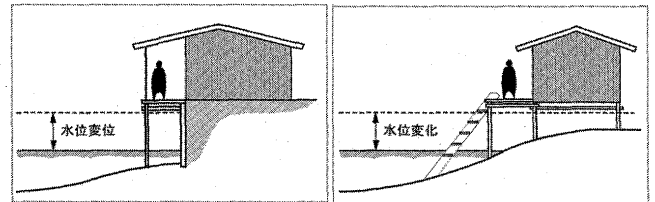


図-29 ター・ペー断面図。左図は商店街などに見られる屋根付きの通路、右図は住居前に見られるバンダイ付きのもの。



写真76 ター・ペーに並べられた野菜。



写真77 ター・ペーは人々の憩いの空間でもある。

v) 船着場 (ター, サラー)

水路とは文字通り水の路であり、人々は舟によって行き来する。そして水路から陸上にアプローチする際、上陸するための装置・空間が必要である。船着場はそうした、いわば水から陸への玄関にあたる空間である。観光船などある程度の規模の船の発着が可能な船着場から、個人の住宅

に付随するものまで規模は様々である。特徴的なのは、待合スペースを含む施設化された船着場で、四方吹き放ちの空間にベンチや公衆電話が設置されているものもある。また洗い場を兼ねているものもあり、人々のコミュニティの場となっている。

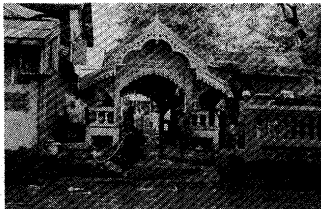


写真 78 人々のコミュニティの場となっているサーラー。



写真 79 小屋の中にはベンチや公衆電話もある。



写真 80 個人の家の前に設けられたサーラー。

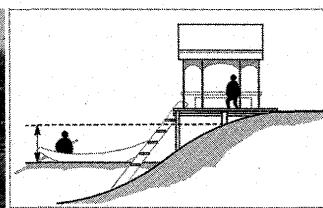


図-30 サーラー断面図

②水の道と水上マーケット

今回の調査地がチャオプラヤー川河口のデルタ地帯に位置し、そこで暮らす人々の生活に水が重要な役割を担ってきたことはこれまでに述べてきた。都市において河川や水路は、その上には建築物がつけられないオープンスペースのひとつととらえることもでき、人々は古くから「水の道」として水運を利用してきたのである。そうした「水の道」は、単なる物資や人の輸送経路ではなく、そこで人と人との交流が生まれ商業活動の場としても使われてきた。現在では観光用のものが有名になってしまったタイの水上マーケットだが、元々はこうした「水の道」に誕生した市民のための商業空間であった。

現在の水上マーケットの商品売買の形態には大きく2つの種類があることは、すでに前項で紹介した。ひとつは商品を載せた舟が河川や水路を航行し、買い手は岸でそれらの舟がやってくるのを待っているタイプであり、他方は買い手が舟に乗り移動し、河川・水路に沿って設置された店舗から商品を購入するものである。

今回の調査で訪れた水上マーケットは2カ所の事例であるが、これらの商業形態の相違と水辺空間の形を整理してみる。

i) 商品が舟で移動する

売り手側が商品を舟にのせ移動し、岸に舟を近づけ陸上にいる買い手との間で商業活動を行う形である。

アンパワーの水上マーケットでは、川に沿った歩道ターペーの所々に設けられたバンダイ付近でこうした商業活動が盛んに行われていた。バンダイは階段状の空間であることから、水位の変化に対応するだけでなく人々が腰掛けられる空間でもあり、水辺における人々の滞留空間である。またターペー自体にも椅子やテーブルが置かれている場合もある。陸上の店舗の一部として使われていることもあるが、水辺に向かって設置された座席もあり、舟上の売り手と直接やりとりが可能な空間となっている。

ダムヌン・サドゥックでは、中心部の施設化された市場付近でこのタイプの商業活動が見られた。水際にはコンクリート製のバンダイが設けられ、トロピカルフルーツを中心とした果物や麺類・スナックなどの食品を売る舟が集まっていた。ただし陸上の市場施設側にも食品や土産物を売る店が軒を並べており、水際空間は陸上と水上で売り手と買い手が互いに交錯する空間でもあった。また、水面と陸上の高低差の大きい場所では、舟から竹を組んだ足場に乗って買い手とやりとりをする姿もあった。

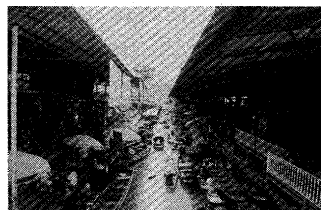


写真 81 ダムヌン・サドゥックの中心部。



写真 82 商品を載せた沢山の舟で混み合う水路。



写真 83 竹で組んだ足場に乗ってやりとりする。



写真 84 陸上にある施設化された市場。

ii) 人が舟で移動する

このタイプは河川や水路を「水の道」ととらえたとき、その水際に沿って店舗が建ち並び、人々が商店街を訪れる移動手段として舟を利用する形である。

ダムヌン・サドゥックを訪れる観光客のほとんどは、観光用の小舟に乗り、水上からのショッピングを楽しむ。舟に乗り中心部を少し離れると、岸に土産物を売る簡易な小屋が建ち並ぶエリアになる。強い日差しを避けるよう大きく張り出した庇の下には、所狭しと商品が並べられ、観光客を乗せた舟が近づくと商売が始まる。各店舗の足下は高床になっており、水位の変化には対応可能になっている。水際にはバンダイなどの装置はないが、観光客が利用する

のは小舟であることから、商品のすぐ近くまで近づくことができる。護岸は特に整備された様子もなく、自然のままであり、陸側に歩行者空間はない。水上からやってくる買い手のためだけにつくられた空間である。

またダムヌン・サドゥックでは、商品側も舟で移動していることから、舟と舟の間でも商業活動が行われる。舟で遊覧中の観光客が、のどの渇きを癒すためココナッツを購入していた。

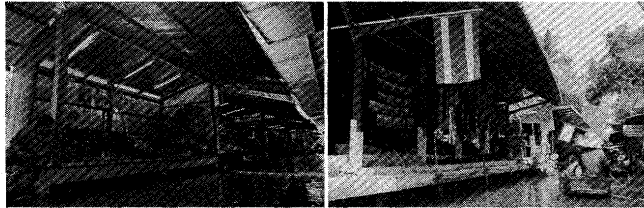


写真 85 岸辺に建てられた土産物屋。 写真 86 観光客は小舟で水路を移動する。

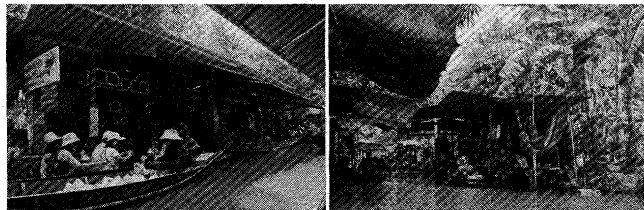


写真 87 舟同士での商売。ココナッツを買う観光客。 写真 88 護岸は整備されていない。自然のままである。

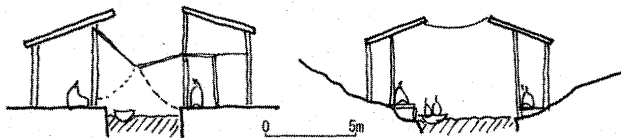


図-31 ダムヌン・サドゥックの水路断面図

iii) まとめ

水上マーケットは、水上交通が陸上の道に代わる役割を担い、物資と人の移動によって都市空間の重要な商業活動の場を形成している。陸上とは異なる「水の道」の特徴としては、水位の変化があるということが大きなポイントである。商業活動を行うためには、水位の変化に対応する水際空間を創ることが必要になる。特に陸側から水際にアプローチできるバンダイは、水位の変化への対応が可能な装置であるだけでなく、人々の滞留空間として機能することができる有用な装置である。しかし、バンダイはひとつの装置であり、陸側にこの空間にアプローチするための有効な歩行者空間が確保されていることが必要である。言い換えれば、陸側の歩行者空間はバンダイによって「水の道」とつながられている。陸側に歩行者空間がなければ、バンダイを設けて水とつながる必要がないのである。

2つの水上マーケットの事例は、川（水路）幅の差や長さの差はあるものの、厳しい暑さの地において、都市空間

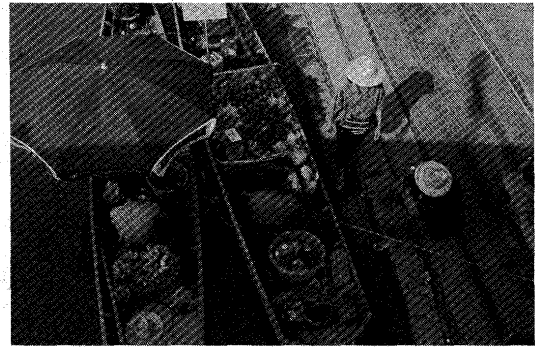


写真 89 果物を積んだ舟とバンダイ。

のアメニティを与えてくれる空間でもある。気候風土を活かしたその土地ならではの観光資源として、今後経済効果も期待できる空間である。

(5) 歩行者空間の類型化

歩行者空間の類型化をめざして、「アジアの歩行者空間に関する研究（その1）」（昭和女子大学学苑 793号）でその可能性となる空間を9事例に対応して整理した。そして「アジアの歩行者空間に関する研究（その2）」（昭和女子大学学苑 801号）では階段空間を対象としてではあるが、空間軸と人間軸によって歩行者空間の概念規定モデルを導入して尺度化を行った。さらに、「歩行者空間の類型化—アジア諸都市をケーススタディとして—」（昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要 Vol. 17）では歩行者空間の概念規定モデルの2つの軸である空間軸と人間軸についてその導入の妥当性を確かめるために、100の事例を元にした多変量解析による検証を行い、2軸の妥当性を確かめた。

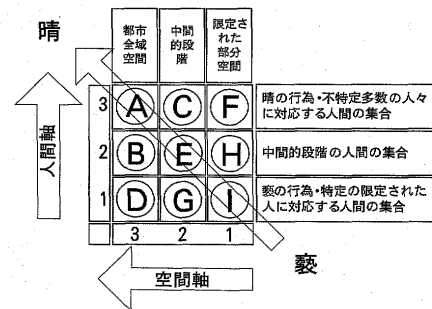


図-32 歩行者空間の概念規定モデル

今回の報告は2軸9類型として規定された歩行者空間の概念規定モデルにより、バンコクおよび周辺都市の水辺を中心とした歩行者空間について適用を行い、その類型化に対する表現力を確かめ、歩行者空間の概念規定モデルの記述性能を確認していく。

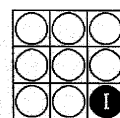
今回の14調査地事例を歩行者空間の概念規定モデルに適用した結果が次の表に示される。14の事例を概観してみたときに今回の調査事例の特徴を整理すると以下のようになる。

調査対象都市・集落と歩行者空間	歩行者空間 概念規定モデル
ヤイ運河河口の町 ワット・カラヤーナミット前の広場からチャオプラー川沿いに細いコンクリート製のサバーンが水上に続く。住宅が建て込んだこの地区はこのサバーンが歩行軸である。	
モスクのある町 モスクのある町の地区全体は細街路網で構成されているが、モスクの周りだけが少し広場的な空間を構成している。	
寺院のある町 ヤイ運河から繋がる支流の運河に沿って細街路で構成された街が続くが、寺院の内部は扉で囲われた境内として豊かな庭を構成している。	
マンゴーの船着場と商店街 ヤイ運河に沿った水辺の商店街は3m前後の木製の歩行者空間がつけられ木造の商店と一体化された屋根付きの水辺の空間となっている。	
象の船着場と広場 船着場の賑わいとその周りの商店によって、広場は構成されており、夕方になると露店が立ち並び更に賑わいをつくり出している。	
パーク・クローン市場 チャオプラー川に沿って物資を運び船着場からマーケットに直結して効率よく市場を運営している建て込んだ市場施設で駐車場も無く人であふれている。	
サンペン (ハン橋周辺) 元々1本の街路空間に露店が並び歩行者空間はその間を狭く通り抜けている。商品と人であふれている。その中心がハン橋となっている。	
ポーベ市場 パドゥン・クルン・カセム運河沿いのこの商店街は商品があふれており、人が通行する部分は狭く人1人がやっと通行できる細街路となっている。	
チャトチャック・ウィークエンドマーケット 週末に開催されるマーケットであり、屋根の架かった部分とオープンエア部分の歩行者空間が地区全体にひろがっている。そして中央部分に広がりのある拠点広場が位置している。	
スアンルム・ナイトマーケット このナイト・マーケットはバンコクの規模を示し、面的な広がりの中で娯楽施設、飲食施設も豊富に配置され、全体として大きな商業広場となっている。	
アンパワーの水上マーケット メークローン川の下流で両側の水辺空間を3メートル前後の歩道が商店街を構成して、建物施設の商店と舟上の商店によって独特な空間を構成している。	
メークローン駅と線路のマーケット メークローン駅は終着駅でチャオプラー川に接している。列車が通るのは日に4回それ以外は線路が歩道となって、商品の陳列台となっている。	
ダムヌン・サドゥアクの水上マーケット この拠点地区は舟上の商店が大量に入ってこられる水路を整備して、土産物や飲食店が地上に並び一大観光地となっている。この拠点を離れると細い水路沿いに仮設的な店舗が並ぶ。	
ロップリーのガッチャんち サバーンによって道路と一軒一軒の住宅をつなぐ通路が作られている。プライベートな住宅の導入空間となっている。	

グレー表示はサブの要素を示す

①細街路空間を基本とするコミュニティ空間の構成を主とする事例: ロップリーのガッチャんち

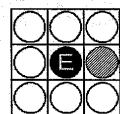
この集落は各民家へのアプローチは幅1メートル程度のサバーンすなわち棧橋で結ばれている形である。いずれの住居からも他の住居にアプローチする場合はサバーンで表通りに出てから再度他のサバーンによって接近しなければならない。つまりサバーン網は完全にプライベートな屋外空間である。



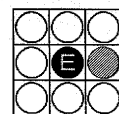
ロップリーのガッチャんち

②細街路空間を基本としながら商店街のようなある程度多量の人間集合を入れる容器として作られている事例: サンペン, ポーベ市場, メークローン駅と線路のマーケット

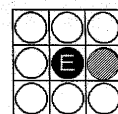
いずれの事例も商店街であるために多量の人々が通過する形態であるが、空間自体は細街路的となっている。つまり人間軸については中間値と判断した。



サンペン (ハン橋周辺)



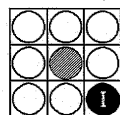
ポーベ市場



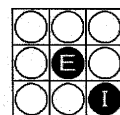
メークローン駅と線路のマーケット

③細街路空間が主であるが、核となる寺院やモスクや広場と複合している事例: ヤイ運河河口の町, モスクのある町, 寺院のある町, マンゴーの船着場と商店街

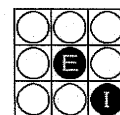
これらの事例は細街路空間を主体としているが、それに付随する核となる空間あるいは施設(寺院やモスク)がありその組み合わせによって地区のセンターの様相を帯びている。しかし両者の組み合わせがアンバランスである点が特徴といえる。



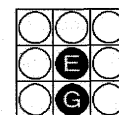
ヤイ運河河口の町



モスクのある町



寺院のある町

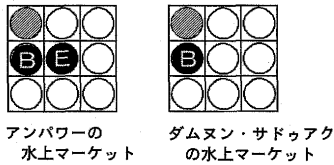


マンゴーの船着場と商店街

④水上マーケットのように小規模なコミュニティを中心とした空間づくりを基本とする事例: アンパワーの水上マーケット, ダムヌン・サドゥアクの水上マーケット

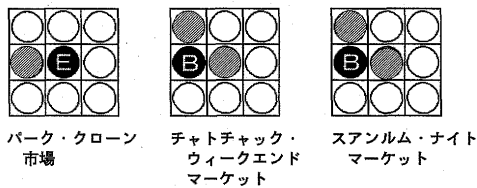
これらの事例は水上マーケットとしての特徴によって単なる商店街とは異なった形態となっている。アンパワーもダムヌン・サドゥアクにしても町の中での位置づけは全体の骨格をなし観光的にも知名度を有しているが、小舟と人

との対応によって人間軸としては小規模コミュニティの位置づけで、中間値となっている。



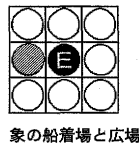
⑤大規模な敷地で大量の人数を集めている事例: パーク・クローン市場, チャトチャック・ウィークエンドマーケット, スアンルム・ナイトマーケット

この2事例は大規模に集客をしている知名度の高いマーケットとして位置づけている。



⑥広場が核となってコミュニティ空間ができていく事例: 象の船着場と広場

今回の調査事例の中でただ一ついわゆる広場として機能している対象である。船着場が核となる施設でそれに商店街が結びついて良好な人々のコミュニティ空間となっている。



以上 14 事例を歩行者空間の概念規定モデルに位置づけることによって6つの類型に分けることができた。もちろん歩行者空間の概念規定モデルは9個の類型が基本であるが、中心の構成や、類型の組み合わせによって実際には複合的類型を読みとっていくことが必要となる。その意味では今回の調査のまとめをするにあたって歩行者空間の概念規定モデルが有効性を持ったといえるのではないだろうか。

(6) おわりに

洋の東西を問わず、人々は水のあるところを居住地とし、都市を築いてきた。バンコクもそのひとつであり、東南アジアを代表する水辺の都市のひとつである。日本を含む世界各都市において、水辺の空間が良質な歩行者空間となっている事例は多数存在し、またそうした計画も多数見受けられる。歩行者空間の構成要素として水辺の環境を整理することは必須である。その意味で今回の調査とその報告は、

意味あるものである。またこれらの地域は水と関連する空間だけでなく、多様な歩行者空間を内包する地域でもあった。それらの空間特性については、今後も他の地域の事例と合わせて整理・検討していきたい。

今回、歩行者空間の概念規定モデルの表現力が、本調査報告で確かめられたことは大きな成果といえるであろう。

参考文献

1. Thailand: Nature & Wonders, Maria Grazia Casella, Asia Books, 2004
2. DK Eyewitness Travel Guides: Thailand, Rosalyn Thiro 他, DK Ltd., 2006
3. Thailand: A Traveller's Companion, Anuar Bin Abdul Rahim 他, Asia Books, 2006
4. Architecture of Thailand: A Guide to Traditional and Contemporary Forms, Nithi Sthapitanonda/Brian Mertens 他, Asia Books, 2005
5. A Golden Souvenir of Bangkok: Ayutthaya and Pattaya, Daniel Reid, Asia Books, 2001
6. Bangkok Then and Now, Steve Van Beek, AB Publications, 2001
7. Sampheng: Bangkok's Chinatown Inside Out, Edward Van Roy, Institute of Asian Studies Chulalongkorn University, 2007
8. Tiao Chumchon Ampawa lae Phuen thi Klaikhiang nai Changwat Samutsongkhram, Nuai Wichai kan Anurak lae Fuenfu Chumchon Khana Sathapattayakamsat Chulalongkon Mahawitthayalai, 2006
9. Ayutthaya: Guide to Art & Architecture, Thawatchai Ongwuthivet/Wilairat Yongrot, Museum Press, 2007
10. 水辺から都市を読む 舟運で栄えた港町, 陣内秀信/岡本哲志, 法政大学出版局, 2002
11. アジアの水辺空間—くらし・集落・住居・文化, 中村茂樹/畔柳昭雄/石田卓矢, 鹿島出版会, 1999
12. アジアの都市と建築 29 exotic asian cities, 加藤祐三 他, 鹿島出版会, 1986
13. アジア遊学 No. 80 (特集) アジアの都市住宅, 高村雅彦 他, 勉誠出版, 2005
14. タイの住まい, 田中麻里, 圓津喜屋, 2006
15. タイの屋台図鑑, 岡本麻里, 情報センター出版局, 2002
16. ロンリープラネットの自由旅行ガイド タイ, メディアファクトリー, 2003
17. 地球の歩き方 D17 タイ, 地球の歩き方編集室, ダイアモンド・ビッグ社, 2006
18. いい旅・街歩き⑨ タイ, いい旅・街歩き編集部, 成美堂出版, 2006
19. 新・個人旅行 タイ アンコール・ワット, アジアネットワーク, 昭文社, 2006
20. るるぶ情報版 A9 タイ, 小川由美子, JTBパブリッシング, 2007
21. 図説 バンコク歴史散歩, 友杉孝, 河出書房新社, 1994

22. 建築探訪 10 都市に住む知恵—バンコクのショッピングハウス, 安藤徹哉, 丸善, 1993
23. アジア遊学 No. 57 (特集) バンコク—国際化の中の劇場都市, 小野澤正喜 他, 勉誠出版, 2003
24. 地球の歩き方 D18 バンコク, 地球の歩き方編集室, ダイヤモンド・ビッグ社, 2006
25. 地球の歩き方ポケット (9) バンコク, 地球の歩き方編集室, ダイヤモンド・ビッグ社, 2006
26. トラベルストーリー 16 バンコク, 昭文社, 2007
27. 歩くバンコク A-1-0001 バンコク在住 37 人のとっておき全 282 店, メディアポルタ, 2006
28. クルング・スィー・アユタヤ, チャイワット ウォラチュットウォラーワット, 2004
29. オーアムパワー, チュムボン・アッパンターノン
30. エメラルド仏寺院の歴史, スパットラディット ディスクン, タイ国宮内庁
31. チャオプラヤー川流域の都市と住宅, 法政大学大学院 エコ地域デザイン研究所 歴史プロジェクト アジアまち居住研究会, 2005
32. 舟運を通して都市の水の文化を探る, 法政大学陣内秀信研究室/岡本哲志都市建築研究所, 2000
33. グローバルワイド 最新世界史図表, 第一学習社編集部, 第一学習社, 1999
34. 世界大百科事典, 日立デジタル平凡社, 1998
35. <http://www.bangkok.com/>, Bangkok.com, 2007/6/22
36. http://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page, Wikipedia, 2007/6/22
37. バンコク・トンブリーにおける水辺空間の形成過程に関する研究, 潮上大輔, 法政大学大学院工学研究科建設工学専攻修士論文, 2001
38. イスラーム地域としての中国とタイ (2) —タイにおけるムスリムの歴史—, 木村正人・松本光太郎, 東京経済大学紀要コミュニケーション科学第 22 号, 2005
39. 歩行者空間の類型化—アジア諸都市をケーススタディとして—, 金子友美・芦川智, 昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要 Vol. 17, 2008
40. 麗江 (中国), 九份 (台湾), 伊香保 (日本) 等の歩行者空間—アジアの歩行者空間に関する研究 (その 1)—, 芦川智・金子友美・鶴田佳子・高木亜紀子, 昭和女子大学学苑 793 号, 2006
41. 階段とその空間特性—アジアの歩行者空間に関する研究 (その 2)—, 芦川智・金子友美・鶴田佳子・高木亜紀子・他 2 名, 昭和女子大学学苑 801 号, 2007

(かねこ ともみ 生活環境学科)
 (あしかわ さとる 生活環境学科)
 (つるた よしこ 現代教養学科)
 (たかぎ あきこ 生活環境学科)